



漆 崇博（札幌国際芸術祭事務局 マネージャー／一般社団法人 AIS プランニング 代表理事）

北海道内でのアーティスト・イン・スクール事業をはじめとした、アートと社会をつなぐ担い手として活動。また、SIAF2014から札幌国際芸術祭に関わり、SIAF2024では札幌国際芸術祭事務局 マネージャーとして、SIAFスクール事業を担当。

トーク内容

- SIAF2014を通じて、札幌のことをなにも知らないなと思った
- 2015年から始まった、札幌を捉え直す取り組みとしての「SIAFラボ」
- 坂本龍一さんも注目していた、活動を一緒につくる場としての「札幌市資料館」
- SIAF2024に向けた小川さんの構想を押し広げた「SIAFスクール」
- 子どもたちや鑑賞者が、創造的で主体的に関わるための仕組みづくりを



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/4yCNdQ9LEJU>



Q 「芸術祭自体が教育・学びの場になる」ということを、 どのように捉えていますか？

「人材育成」や「教育普及」といったことを、もうすこし拡張して捉えていきたいと思っています。我々からなにかを教えるとか、伝えるとか、一方通行ではない学びの場にしていきたい。そこに関わった人たちが、より創造的に、主体的に関わっていけるような仕組みにしていきたいなど。

私はこれまで、「アートと社会をどうつなぐか」というコーディネーション、特に学校や地域とアーティストをつないでいく活動を20年くらいやってきました。2012年にSIAFに声をかけていただいたときも「そういう活動をSIAFでもするのか」と思ってたんですが、自分のやってきたことをそのままやるということは、実はSIAF2020まではあまりしていませんでした。

そんな中、SIAF2024に向けて小川さんがディレクターになり、大きな構想の中に「SIAFスクール」「アーティスト・イン・スクール」という言葉が入っていて。それで小川さんとスクールのお話を詰めていったときに、すごく腑に落ちたのが「SIAF自体が学びの場になる」という言葉でした。それなら、いままでSIAFで資料館をベースにやってきたことや、自分がアーティスト・イン・スクール事業でやってきたようなことを、もうすこし集約して「SIAFスクール」の中でいろいろ展開できそうだな、と思ったんです。

SIAF2024で印象的だったことがあります。SIAFスクールで実施した「出前授業」を通して、子どもたちがつくった雪の結晶の画像がアーティストによって作品化されて、未来劇場で紹介されました。そして、そこに参画してくれた学校の子どもたちを招待する、という取り組みを行いました。面白かったのが、招待で未来劇場に来てくれた子どもたちが、今度は週末に保護者の方たちや友達を連れて、自主的に鑑賞ガイドをしてくれていたことです。未来劇場で配布した会場マップは、小学生でも読めるようなものにしていたこともあり、子どもたちがそれを持ってお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんに説明をしている風景が結構見られたんですね。

もちろん「そうならいいな」と思っていたけど、子どもたちが主体的に「もう1回行きたい」とか「自分の作品を見てほしい」と感じて、会場で「この作品がこうなんだよ」と自分の作品以外のことをどんどん伝えているのが、すごく印象的でした。そういう創造的で主体的に関わるための仕組みづくりが、SIAFスクールとしてはもっとできるのかなという気がして、それをSIAF2024で試せたので、さらに発展・拡張していくといいなと思っています。
